

ホームページ

<http://www.nihonkanpoukyokai.com/>

E-mail:

j.kampo@jeans.ocn.ne.jp

日本漢方協会通信 ①

令和5年 4月

当協会名誉顧問 伊藤敏雄先生に感謝

日本漢方協会の名誉顧問をなさっていた伊藤敏雄先生が2月22日にお亡くなりになりました。大正15年お生まれの96才でした。葬儀は親族のみで執り行われました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

伊藤敏雄先生は昭和25年より「内田商店(現ウチダ和漢薬)」に入社し、副社長・社長・会長を歴任なさいました。平成15年にウチダ和漢薬を退社なさり、水彩画を楽しみ画集を出版なされています。

54年間は生薬問屋としての仕事を通じ多くの漢方関係者と交流し「生き字引」としての役割をはたしてこられました。先生は漢方医薬新聞に「生薬春秋」と題して182回の連載記事をお書きになりました。それを単行本にして東洋医学社からお出しになっています。

昭和25年から内田商店の機関誌「和漢薬だより」を創刊しそれが「和漢薬」と改名し、平成15年600号までお一人で編集なさったとお聞きしています。100号単位で合本としてまとめを出版なさっていらっしゃいましたが最後の501号から600号の合本は出版できなかったのは心残りではなかったのではと思います。

平成22年「第30回日本漢方協会学術大会」で「戦後の漢方界/私の方人脈図」と言う演題で特別講演をいただいております。

先に書かせていただいた「生薬春秋」の「連載にあたって」の文中より先生が私たち後輩に伝えたかったことを転記させていただきます。

「……漢方薬という世界に仕事らしきものをさせてもらって50余年間、人は「長い間ご苦労様でした」といってくださる。誠にありがたい次第だが、過ぎてしまえばあつ

という間である。庶民から天下人になった秀吉も、辞世の歌に「浪速のことは夢のまた夢」と慨嘆してあの世に旅立っていったが、人生は流れては消えゆくたかたの泡のようなものかもしれない。だが、この五十余年という時間のひだの間をさまよい出すと、次々と浮かんで消え、また、浮かんでくる幻影にちりばめられていることに気づくのである。一個人にとっては己のとおってきた軌跡で、他人にとって何の価値のないセピア色をして古い写真であっても、本人とすればその時印した足跡であり、それを除いた自分はない」

三上記



日本漢方協会通信 —②— 2023年4月

読書とわたし（思い出すままに）

会員 岡崎 仁子

私は小説が好きである。いつ頃からか思い出せないが、バックの中には文庫本が入っている。通勤する電車の中での読書はいつものこと、時には先が知りたくて、夜通し読んでしまうこともあった。今はもうできないけれど、

最初に手に取った文庫本はミステリー小説で、和久俊三、横溝正史を読んでいたように思う。ちょっと生意気になった頃には、瀬戸内春美（寂聴）、桐嶋洋子、落合恵子、佐藤藍子の本を手にしていた。その後は、田辺聖子、宮本輝、宮部みゆき、畠中恵、葉室麟になり、今は高田郁、西條奈加が好きな作家である。こうしてみると私は、女流作家が好きなんだなあと思う。

佐藤愛子の「みちるとチルチル」は、電車の中で最終章になり、あまりに切ない結末に涙が止まらず、声を殺して号泣したことは今もいい思い出である。

田辺聖子の「私的生活」で、自立した女性の生き方に触れ、憧れたこともあった。そして田辺聖子のファンになった私は、新刊が出るのを楽しみに過ごし、「かもかのおっちゃん」シリーズを愉しみ、「源氏物語」は、彼女の手による物から読み始め、瀬戸内寂聴へと読み継いだこともあった。

高田郁のデビュー作「出世花」を読んだときは、こころが痛くなり、暖かくなり、何があっても人は生きていくのだなと感じた。「みをつくし料理帖」を手にした時、一冊読んですぐに次が読みたくなり飯田橋の書店で探し五冊目まで買って読んだ。その後は半年に一冊（2月、8月）発売されるのが待ちどおしかった。2年半後10冊で完結した、長かった！

「みをつくし料理帖」は、角川春樹事務所で映画化されたり、TVドラマになったりしたので、ご存知の方も多いと思う。最近読み返したので、ご紹介したい。

この小説は、大阪の有名な占い師から濡は「雲外蒼天」、野江は「旭日昇天」という相を受けた二人の少女の成長物語である。時代設定が江戸時代のこともあり、遊郭が出てきたり、身分違いの恋愛があったり、幕府内の話があったり、下級武士の儉しい生活が出てきたり、また登場人物も千差万別であり、生い立ちも様々で、読んでいて楽しくてあつという間に時間が過ぎてしまうこと請け合いである。

小説中に登場する町医者源齋は、「医者立場から言えば、食べ物には薬という側面がある」ことを話して「口から摂るものだけが、人のからだを作るのです」と言い、「茶わん蒸しは処方薬」と言っではばからない。ちょっと漢方に通じるところがあるように思う。

小説に登場する料理は、作者である高田郁が実際に調理していることも、感動に値する。料理好きな私には、小説と料理を楽しむことができ、嬉しさ100倍の小説であった。興味を惹かれた方は、ぜひその手に取ってお楽しみください。（文中敬称略）

日本漢方協会通信—③ 2023年 4月

2022年度の最後の講義を聞いて

会員 安倍眞知子

『基礎』の話では一般用医薬品及び薬局製剤の活用で、八木先生の体験から実際に心がけている基本事項を具体的にお話しされていました。そうそう！快食快眠快便、大事ですよ、相談に来る患者様はどれか抜けていることが多いです。私はそれに快樂を足して4つ、それに尽きるといつも思っています。『類聚方広義』では大友先生のたくさんの症例をまじえてのお話。大友先生というといつも電子レンジに入ったチキンを連想してしまいます。今回は靈枢半夏湯、炙甘草湯と白朮の使い方にびっくり。粳米は玄米で其構造から水を保持すると何かの本で読んだことがあり、それと水を流す半夏との反対的作用がある組み合わせが偏在の調整をする話はおもしろく、身体が調整して選択するのかと思いました。また蕁麻疹の水被りで治るのは、船酔いで気持ち悪いときに漁師は冷たい水を被って治すのと同じ働きなのかなとか、夜間尿のある人にはふつう八味丸とか思いますが、四逆散だったり、白朮が抗利尿作用で腸の方に水を持っていく話などレアな症例がいっぱいでした。試しに白朮の煎じを作ってエキスと混ぜて飲んでみました。お通じが…！（下剤は入っていない）『トピックス』では稲木先生が補剤の話を多くの古典の文献から、列挙。いまコロナ感染後の倦怠感の人に多く投薬されているもので、とても参考になりました。『生薬概論』では飛奈先生が薬局方収載生薬の起原植物及び起原動物が論文などで使用されるものと違うのは法令に縛られているなどの注意を教えてくださいました。時代はDNAによる分類になっていくのに薬局方はどうなっていくのか、変えていくのも大変と思いました。さて今回で最後の講義となりました。1年間、陰で支えてくれた役員、スタッフ、受付の方たち、講師の先生がた、本当にありがとうございました。漢方は奥が深いです。面白いです。まだまだ探求すること山のごとし（ ; ∇ ; ）～ひゃ～！